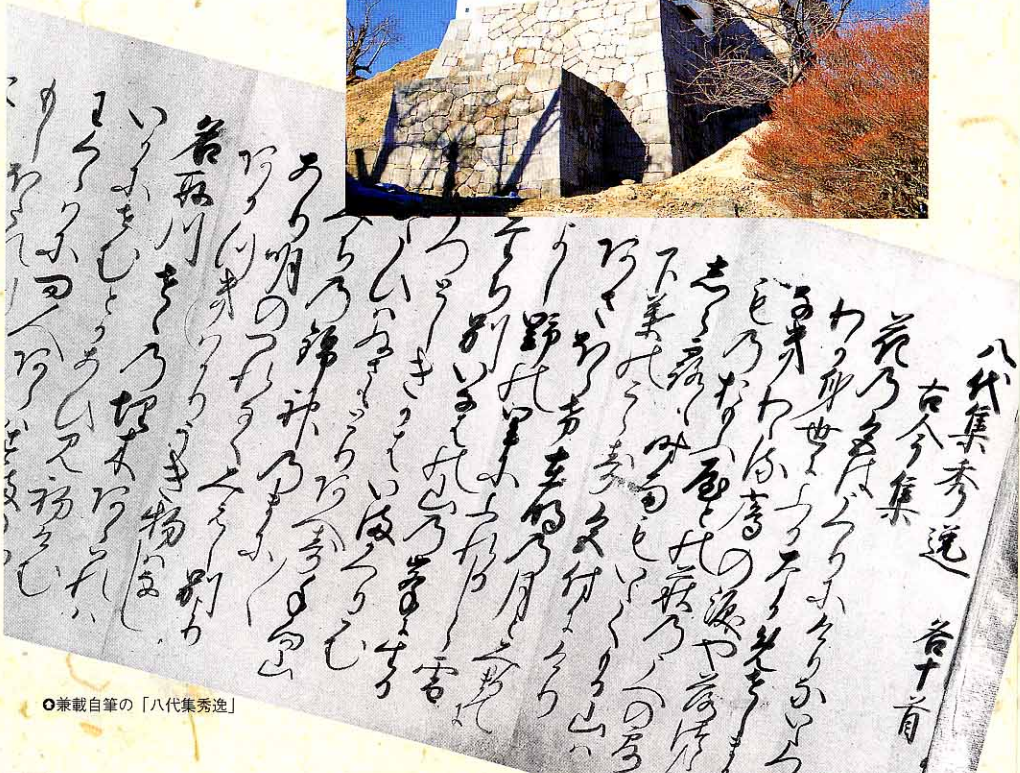




○南湖公園



○兼載自筆の「八代集秀逸」

八代集秀逸 卷十首
は供に準勅撰連歌集で、室町最盛期の連歌の典型を示している。

82 万葉集

和歌 奈良時代末期 笠女郎

『万葉集』卷三に笠女郎が大伴家持に贈った歌の二首が、陸奥の真野の草原遠けども面影にして見ゆとふものがある。この真野は現在の鹿島町の真野川流域一帯をさすものであることが戦後に定説となり、昭和三五年この歌碑が桜平山に建てられた。その近くには万葉植物園もつくられ百数十種の植物が集められている。笠女郎は生没年、履歴不詳。家持に贈った恋歌に優れたものが多い。

このほか万葉集所収の本県関係の歌には、「安太多良」「会津嶺」「安積山」「松が浦」などを詠んでいるもの七首ほどがある。



万葉植物園 (鹿島町)

89 露沾公詠草

俳諧 江戸時代前期 内藤露沾

時は秋芳野をこめし旅の土産 (はせを餞別)

笠句へ桃咲閑の切通し (勿来閑)

暑くとも秋の葉音や旅紙帳 (藤躬へ餞別)

一句目は芭蕉への餞別句。三句目の藤躬は、須賀川の相楽等躬に対する句となっており、露沾が芭蕉をはじめ江戸俳人たちのパトロンとして、また自らも風雅の世界に遊んだことをうかがうことができる。門人数、交遊も広く、作品は多くの俳書に見られる。



市原代女 (いちばら・たよめ)
安永・寛政元・八・四。俳諧の伝統を引き継ぐ須賀川が生んだ女流俳人。酒造業の家に生まれ、早く夫に死別。俳諧を前白の鈴木道彦、白石の乙二(おつじ)師事した。

松平定信 (まつただいら・さだのぶ)
宝暦八・文政二・五・一三。徳川吉宗の孫、田安宗武の三男として生まれ、白河侯松平の養子となる。寛政の改革の厳しい為政者であると共に、すぐれた文学者としてもあった。南湖を築き農業用水池とし、同時に文学的遊樂地として共楽亭、二六寮一七勝碑を建てた。また画家・並田室田善を育て、谷文晁を呼び白河たるまの意匠を考案させた。

猪苗代兼載 (いなわしろ・けんさい)
享徳元・永正七・六。会津芦名の流れの猪苗代城主の家に生まれて出家したあと、心敬や宗祇を師として連歌界で活躍したが、五〇歳のとき関東に帰り、警城平に庵を結んだ。のち会津各地を巡り、関東の古河に没した。

郷里の小平洞天満宮には、兼載晩年の自筆一紙(本墨書八代集秀逸)があり、県重要文化財となっている。また天満宮、若松の自在院には碑が建っている。

内藤露沾 (ないとう・ろせん)

明暦元・五・一(享保一八・九・一四)。本名義興。警城半藩主内藤義泰(風虎)の二男。兄の死後藩主を息子に嗣がせ、自らは江戸藩邸と平高目の自邸とを分け、専ら俳諧に親しんだ。家老松岡隆之助(やからのすけ)のお家業を取り戻す(岩城騒動)を処断したことも知られている。若石太郎編『内藤露沾全集(昭34)』は、諸俳書から露沾句を網羅したもので便利である。

51 花月草子

隨筆 松平定信 文政元年(二八一八)

定信が幕府老中を辞し、白河に隠居したのち、好きな学問や風流世界のことなどを書きつづった随筆集である。地元関連の記事は少ないが、安積沼(郡山)の花かつみを論じ、能因の「こも」説を排し、「かたばみ」説を打ち出している。

他には、家中の学者に編集させた『白河風土記』『白河古事考』があり、これには古来謎とされた白河の関を、旗宿の関の森と考証させている。また隠居後



花月草子

65 新撰菟玖波集

連歌集 猪苗代兼載 明応四年(一四九五)

文明二年(一四七〇) 応仁の乱を避けて関東に下った心敬や宗祇の連歌の席に加わったのを機に、心敬を師と仰いだ兼載は、心敬と共に白河を経て会津に至り、そこで心敬から連歌の奥義を伝授された。のちに京都に上り、宗祇の後をうけて連歌師最高の位である宗匠に就いたのは三八歳の時であった。

『新撰菟玖波集』全二〇巻は、明応四年(一四九五)猪苗代兼載が宗祇を助けて編み、後土御門天皇の奏覧